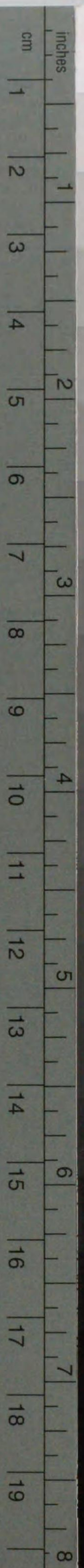


# Kodak Gray Scale



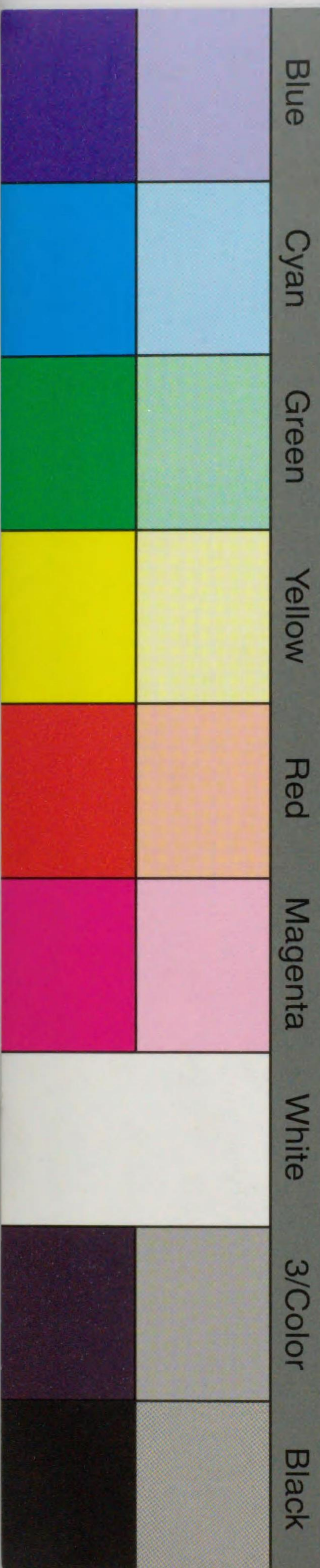
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



159  
80

159-80



\*1200800109022\*

湯地津尾子の傳  
附賢婦人の話と訪由



和

湯地津尾子の傳

附賢婦人の跡を訪ねて





159-80



本校講堂に安置せし湯津地子像







湯地津尾子籬側に立ちて論語を聞き書きの圖



新刊法華經の巻目





本校卒業生湯地津尾の子墓に詣つ

1914年11月



## 序

愛知縣立第一高等女學校長鵜飼金三郎君夙に女丈夫湯地津尾子の爲人を崇敬し我國婦人の模範人物として女子教育上に資する所あらんごし之か爲に力を致せる事此に年あり今又躬ら筆を執り其の事蹟を編し序を余に索む之を閱するに津尾子の面目躍如として恰も其人に接するの想あらしむ今や歐洲の戦亂將に其の局を結はんごするの時に際し彼の地の婦人が戦時中活躍せるの跡に鑑みて之を我國婦人の現狀に照さは蓋し思半に過くるものあらん此時に當り益々津尾子の徳操を顯彰し婦人の自覺を促すは實に時勢の要求なりご謂ふへし而して今日に於ける社會の實情は之を津尾子の時代に比すれば其の趣同からざるものありご雖も其の精神の存する所に至りては毫も異なるなきのみならず世



界列強の間に介在せる我邦の現状に在りては益々婦徳を涵養し  
時勢に適應せる活動の實を擧ぐるに努めざるへからず余曾て同  
校主催の津尾子刀自追弔會に臨み又其の墓を展し故人を景慕す  
るの念轉々切なるものあり鵜飼校長の常に津尾子を推稱せる亦  
偶然に非ざるなり讀者斯書に依り津尾子の爲人を詳にし研鑽以  
て修養の功を積まんか其の家國を益する蓋し鮮少に非ざるへし  
乃ち喜んで一言を卷首に弁すこ云爾

大正七年十二月二十三日

愛知縣知事 法學博士 松 井 茂

詠湯地津尾子刀自歌并反歌

こゝろくゞの妻もあれども、母そばの母はあれども、こきいづる湯地  
の刀自は、昔いま稀なる人、玉くしげ二人の親に、せのきこに一池こ  
ろろよ、ほ光やゝみりり、池しここは、いまやゝいふもたろりや、家  
の風ふきおこさむごまころを神みちりひて、池くしむごこの  
をくしき、ある時は佐敷の山の山道をひごせゆりせ、あるごきはま  
がきのもせよ、人しきずりくれしのび、せむき夜もあつきほひるも、  
こが身をばあゝを見せずて、ごしつきをひごし來よ、あゝ、あゝ、くばあ  
せゆくしくごこの、いゝで世よあゝそれならむ、細川のきこよしら  
れて、あずくのほ光ごごまひ、九の星のひあせの、よの光あよあ  
ゝやきよれ、春風の光ごやのさごの、徳源寺はあゝのいしは、こゝ



むしてくづきゆくとも、ひこづまのあゝ美ごありて、ひこのたやの  
あぶ美ごありて、よろづ代もあふがきゆあむ、八千代はであぶやき  
ゆあむ、あそれくゝとが湯地の刀自、なつあしの刀自。

せしきやまあさしもふ美てあよひらむ

そのよおもへばいまも身にしむ

徳源寺美はあ石はこあむせご

あときこさをはこきはかきとよ

大正七年三月一日

愛知縣立第一高等女學校の爲に

御歌所寄人 池邊義象

小 引

湯地津尾子を本校生徒の模範婦人に推舉しましてより已に滿十年を經過して居ります。之を教育事業の上より考へますれば必しも長くはありませぬ。けれども其間に本校の進化向上したことは決して尠くはない。中にも湯地津尾子の精神の體得に至りましては一段と其光を放つて居るやうで私の喜びは此上もありません。然し我國今後の婦人の任務を想察しますれば更に大に津尾子の精神を擴充して日本婦道を涵養することは實に現下の急務と存じます。それで嘗て編した湯地津尾子の傳に更に過般刀自の舊地を訪ねました當時の事實を纏めて一書として本校卒業生生徒の坐右に與へ彼等をして益本分を完うせしめんとの微意に外なりません。

大正七年十二月二十五日

愛知縣立第一高等女學校長 鵜飼金三郎



目次

湯地津尾子の傳……………一  
賢婦人の跡を訪ねて……………二九  
緒言……………二九  
佐敷……………三一  
津尾子の舊址……………三三  
古老の逸話……………三五  
上林先生と佐敷川……………四〇  
湯地家と佐々家……………四二  
津尾子と徳操……………五二  
附言……………五八  
湯地津尾子の年譜……………五九

湯地津尾子の傳

津尾子の幼時

津尾子は熊本の藩士佐々氏の出でありまして、先年物故せられました佐々友房氏なごの大伯母君に當られる御方であります。丁度今日から百十三年前、光格天皇の御宇寛政八年に肥後國葦北郡佐敷の里に呱呱の聲をあげられたのであります。稱檀は二葉より香ばしいとの喩にもれず、幼い時から大層心ばねのよい、温順伶俐な生れつきで、御兩親の御喜びは一通りではなかつたのであります。固より當時は今日のやうに教育の機關も整頓しては居りませす、學校などもなかつたのであります。たから、津尾子も一般の人の如くに裁縫のかたはら伊呂波位を學ばれたに過ぎなかつたと云ふことでもあります。しかし段々と成長せらるるにつれ、益心だてがよく加ふるに容貌も十人並すぐれて美しい御方でありましたので土地の評判となり、年頃になられぬさきから早や方々より御嫁に貰ひたいと望む親達も澤山あつたと云ふことでもあります。





湯地龍彦氏との結婚

二

此の佐敷と申す所は、熊本から二十里も離れて肥後と薩摩との國境に當る所であり  
ます。當時は細川藩士隠罰の謫所の一でありまして、隠罰として祿を減じ此の地に  
在勤仰せ附けたのです。世人は此の地を薩摩押と稱へ、國境の要所として番代も置  
かれてある程の所ではありますが、謂はば世に容れられぬ變者の集つた所でもあります。  
それでありますから其の所に居る武士も其の所へ謫せられる武士も、一部からは忌  
憚もせられたが、又一部の人々からは暗に氣慨ある者として尊敬せられて居た傾き  
があるのであります。津尾子の祖先佐々氏は、或時農夫が馬に壹を積みてゆく後よ  
り火をつけたとか云ふ罰により、貶謫の身となり、數代此の地に居住せられて居たと  
申すことであります。此所に又同じ熊本の藩士で、百石許りを領して居られました  
湯地龍彦と申す人がありましたが、其の父順助氏は常に報國の心厚く文武兩道に達  
し、曾て鎗術修業の爲奥州を遍歴して武名を轟かした人でありましたが、夙く身まか  
られたので不幸龍彦氏は文武の素養に乏しい、其れに性來此の人は至て豪俠にして  
小事に頓着せず、軌道を逸すること尠からず。當時各藩共に漸く文弱に流れ初めた  
頃でありましたから、つい斯様な人は容れられず貶謫せられて此の地に居られたの  
であります。

其の藩の制として此の地に貶謫せられた場合には、大抵夜分城下を立ち退くが例で  
あつたのでありましたが、氏は白晝大鎗をかかへ時の藩校時習館などへまゐり、友に  
一々別を告げて今より百年邊境に止るべき旨を告げて出發せられたと云ふやうな  
一風かはつた奇人でありました。しかし津尾子の父母は其の人物を見込み所々よ  
りの婚姻申込を退けて、龍彦氏に嫁がせたのであります。これ實に津尾子が十六歳  
の秋でありました。

克く仕へて姑を満足せしむ

十六歳と申せばまだ小供あがり何等思慮分別のあらう筈がない、大抵なら無理を云  
うて親達を困らせて居る頃合でありますけれども、しかし可憐なる花嫁津尾子は、結  
婚の日より一層言行を慎み、如何にして夫を扶け如何にして姑に仕ふべきかを考へ  
られたと云ふことであります。津尾子には一人の姑がりましたが、此の御方は氣  
丈夫な餘り嚴格に過ぎる程であつたと云ふことでありますから、定めて忍び難いこ



と、仕へ難いことの折々あつたのでありませう。けれども津尾子は常々から世間にありがちな姑と嫁との争ひ、それに次で起る一家の不和合のあるのを太く慨せられて居りましたから、此の間も克く忍び克く耐へ赤心を以て仕へられたので、姑は非常に喜び此の上なく満足せられたと云ふことであります。

#### 二子の出生と津尾子の決心

月日に關守なしとやら津尾子が二十一歳の時には千代子と云ふ女の子が生れ、二十四歳の折には男子が生れて暉狼と名づけられました。一女に次で一男を得られたる湯地家の喜びは如何許りであつたでせう。

津尾子は喜びの中からも今の境遇を思ひ、さては如何に子女を教育すべきかと考へ、又教養せねばならぬかを反省せざるを得なかつたのであります。思へば藩士として城下にあるべき夫のあられもない此の邊境に謫せられたのは口惜さ限りなし、いでや此の幼兒を教育し、掟に叶つた文武兼備の立派な武士にしたて、天晴れ家名を再興せばやとの津尾子の決心は、片時も其の頭から去らなかつたのであります。さても女丈夫の健氣なる振舞かな。

#### 暉狼を儒者の門に入る

佐敷の里に上林と云ふ儒者が居られました。津尾子は暉狼の七歳になるをまちて其の人の門に入れ學問のことを依託せられましたのであります。同じ村内とは申せ、宅より此所迄は一里程ありまして、七歳足らずの幼兒が毎日の通學には仲々容易なことではない。殊に田舎の山道のことでありますれば途中に山あり川あり道と思ふ程の道もなければ行き通ふ人とても少く、げに寂しく恐ろしい所で、到底開けた今日都人の想像だも及ばぬ所であります。されば津尾子は家用忙しい中からも暇を伺ひ、多大の希望を幼兒の未來に寄せて自ら監督しながら、毎日先生の下へつれゆかれたのであります。昔から賢母と稱せられる御方は、皆子供の教養を自分でなされるやうに思はれますが、果して津尾子もさうであつたのであります。

#### 愛兒の後より見わかれに従ふ

「可愛い子には旅をさせよ」とは、何時の昔に誰が言ひ始めし事か、久しく兒童教養の第一義となつて居りますが、兎角世の親達は子供が可愛いが爲に反つて其の子の教育を誤ることが多いやうであります。津尾子は特に此の點にも注意せられまして、



愛兒の獨立自治の精神を涵養し、我儘な臆病卑屈な習慣の起らないやうにとて、前に述べた如く暉狼を伴はれて上林先生の塾へゆかれるにしても、決して兒の手をひき或は脊負ふなど云ふことは斷乎としてなさらなかつたのであります。誰しも子を思ふ親心は一つでありますけれども、切な自分の心を押へ十間二十間の後よりみねかくれについてゆかれたと云ふことであります。

牛若丸を引いて我が子を諭す

一日お稽古が遅くなり歸途日が暮れましたが、生憎時雨ふり注ぎて月影暗く大人でさへも恐ろしく物凄く思はれる程の晩でありました。暉狼は最初の程は我慢していつもの如く母のさきへ立つてまゐりましたが、餘りの恐ろしさに「母上近うより給はれ」と側近くすり寄りましたら、さても臆病なことを云ふ子かな、昔戰國の武士は七つ入つで既に戰陣に送られしこともあり、汝が常に云ふ牛若丸は子供の時より鞍馬山の奥にこもりて劍法を學ばれしぞかし、これ程の處だに恐ろしと思ふは我が子でなきぞ、とすげなく前路へ押しやられたさうであります。此の如く如何な風雨霜雪の日でも休むことなく、又如何な事情があらうとも必ず此の事を守り、嚴として破られなかつたと云ふことであります。

天晴な我が子の仕打を喜ぶ

前へ押しやられた暉狼は、涙ながらもやう／＼たどつてまゐりましたが、恐ろしさは髪の毛を後よりひかれるに勝る思ひがありました。しかし到底母様の堅き容れられる氣配もありませぬから、氣を勵まし勇氣を出して進みゆかれました。本意ならずも我兒を押しやり、後より見送りつゝ、ゆかれる母の心中如何でありましたらう。稍程經たと思ふ頃、ザンブと音して迸る水煙薄暗き月影にも打ちきらめきました。さてこそしまつたり「吾子よ……免してくれ」と宙を飛んで駈けつけて見られると、河にはまつたと思つた暉狼は脇指ぬきて其所の川邊にツツ立ちて身構へして居られました。「やよ怪我はなかりしか事情は如何」と尋ねられましたら、母上安心あれ、今河邊の瀬を手取りにせんとはやりしも取り逃がして残念せり」と、かくときかれた津尾子は手を拍ち「天晴なり我が子よ、武士の子よ」と肩押し撫て喜ばれたさうであります。

學問の進歩せざるをみて自を省みいや増す母の苦心

生れつき物覺え惡い暉狼には、かく迄の母の心盡しもそれ程の甲斐もなく學問が



進みませぬから津尾子はそれを深く悲み、これもつまりは我が身の心盡しの足らぬが爲なり、かくて此の山里に朽ち果てなば祖先に對し申譯なしとて愈心を固め、上林氏へ暉狼をつれゆきては、先生が暉狼に授けられる讀み聲の籬の外に漏れるままに、竊に其の側に身を潜めて一々用意の紙に假名にて書き取り、暉狼の覺わにくき所は心覺わに印を付けおき、家に歸りては裁縫などのかたはらに復習をさせ忘れた所は書き取りの中より繰り出して教へ或は叱かり或は慰め我が身を忘れて苦心せられました。此の如くして一日も怠らず、終には論語全部の書き取りが出来たと云ふことでもあります。人目を忍んで盡す母の真心には無情の草木も泣いたでせう。

#### 書き取りの論語と軸幅

家名を思ひ子を思ふ赤心は、津尾子が廻らぬ筆にも力を與へて積り積りて論語二十篇の書き取りとなつたことは前に申しました通りであります。が、さて此の書物は餘りに珍書でありますから、後になり諸方より借る人の多い爲ちりくになり或は破れたりして居りましたのを、暉狼が大きくなられてから有り難い母の心盡しになつたものを粗略にしてはならぬとて、一つに取り集めて表装せようと思はれたけれど

も、津尾子は強て之を止められたので、其の儘となつて居りましたが、其の孫丈雄氏が明治三年にその志をつぎ残り居るものをまとめて表装せられました。時の家老職長岡監物氏夫人(長岡監物氏は即米田是容氏のことなり先年朝廷殊に正四位を賜はる今の男爵家なり)は

聞くまゝにかきながしたる水莖のあそこそ家のをしへなりけれ

また

敷島のやまどこゝろの色も香もふでにとめたるからのことのは  
と云ふ二首の歌を贈られたと云ふことでもあります。しかし惜しいことには之も十年の役に兵火にかゝつて今は其断片だにないと云ふことです。明治十四年せめてもの心やりにと丈雄氏が其の道の人に謀り、津尾子が彼の籬側に潜み先生の讀み聲を書き取り居れる圖を畫かせ、軸幅として大切になされて居りますが、之を傳へ聞いた人々は其寫しを得て家庭の軸幅とし尊敬して居る向きも少からぬと云ふことです。曩に熊本の尙綱高等女學校長はこの軸を丈雄氏よりかりうけ、女子教育の爲に同縣下を廻はり津尾子の徳を宣揚せられたと云ふことでもあります。暉狼は此の如



き母の苦心と熱烈なる真情とに動かされ、後々は上林先生も驚かれる程に學問が上達せられたと云ふことです、げにさもありぬべしと思ふのであります。

津尾子死を以て其の子を誡む

白い糸の黒くも赤くも染りゆくやうに、人も住む里の友のよしあしによるものであります。其の頃佐敷の里の若者共の中には相集りては放逸怠惰の事のみ耽つて居る者も多く、たま／＼學業に志すものでもあれば反つて無用なりと嘲けり笑ふやうな悪風がありましたから、折角に母の赤心に感じて専心學問に従事せられるに至つた暉狼も、時としては其等の弊風に誘はれるやうになられたのであります。津尾子は之をみて大に驚き度々懇に意見をなされましたけれども、時には母の眼をぬすんで密に外で悪友と遊び暮されることもないではなかつたのであります。

ある日津尾子は深く思はれることがあつたとみえまして、暉狼を召し共に家の後の四面人聲もきこえぬ森の中にゆかれて申されるやうに、汝に常に繰り返へし諭し、は家の行末汝が將來の出世を思へばなり、汝が父君のあらぬ事よりかゝる邊鄙の地にさすらへたまふは家の汚なるに、汝は其の耻をすゝがんど思はずや。汝をして如何

にも其の耻を雪ぎ家名を起さしめんと明けくれ心を苦めをる母が心を汝は汲みしらずして、かくも我が教に背く事よ。今は母子の縁もこれ迄なり、我も生きはせじ汝も世にながらへさすまじと息せきこめて暉狼のさゝれた脇指をひきぬきて睨みつめて今や刺さんとせられたのであります。暉狼は母のこの有様を打ち守り唯泣き沈む許りでありましたが、稍ありて、何卒しばし待たせ玉へ、かくまでに御心を痛めまゐらせし私の罪は免したまへ、自腹かききつて御詫び致さん其の刀渡し給はれと眞實改悛の氣色面に顯はれたので、津尾子は心から喜ばれ、よくもいひしかな、よし／＼かこれ其の腹しばし預らん、今後此の如きことあるべからずとて刀を鞘に納められ、太く後來を誡められたと云ふことであります。

身よりも大なる太刀を佩かしむ

津尾子は其の子を文武兼備の士たらしめんとて、それ／＼心を注がれて居る事はこれらの事柄により分るのであります、尙剛氣の氣象を養はんが爲にとて、幼い暉狼に大層いかめしい又恐ろしく大なる太刀を佩かせて、時には佐敷より二十里をへだ、れる熊本へ其の太刀を佩かせたなりに往復させられました。しかし何分にもまだ



腰が弱く單に遠路を歩むさへ困難であります位の頃でありましたから、常に手にかへながら往復せられたと云ふことであります。この太刀は東京九段坂の遊就館に今尙保存せられて、ありし昔を偲ばしめるのであります。

子に臥し寅に起きて一家を支ふ

今迄は母として津尾子が子女の教育に心をつくされた物語りを致したのであります。津尾子が一方此の如くに暉狼を教養なされると同時に、又一方家庭の主婦として、妻として、人の及ばぬことをなされて居るのを御互に見逃してはならぬのであります。

前にも申した如く夫は豪放な御方でありましたから、其後浪人の身となられました。従て家計甚豊でない。津尾子は薪水の勞も自取り所謂子に臥し寅に起きて賃仕事などをなし一家の生計を支へられたのであります。殆ど十三ヶ年の歲月朝夕の烟さへ立てかねる中にも、人より後指などさされる事もなく、湯地家の名譽を全うせられたのは、全く津尾子の勤儉勤勞の賜と云はねばならぬのであります。

自を節し自を忍び夫を思ひ子を教養す

津尾子が昔津氏の隱宅に居られました頃は殆貧の極に達して居たと云ふことであります。今日の世にありがちの浮薄な女とは違ひ、貧苦に酷しくあればある程夫に同情し、夫も定めて今の貧苦に太く心を痛め居られるならんとて、勉めて不快の顔を見せず、よく仕へよく慰めよく勵まし自を忍ばれたと云ふことであります。且又貧の爲に子供の元氣が畏縮してはならぬと思はれ、何事も足らぬがちな中からも暉狼の教育に心を用ひ、我が食をわがちでも辨當の不足なきやう文房具の不自由なきやう先生の御禮などかかさぬやうひたすら力められたと云ふことであります。

天保の大饑饉

斯程迄に津尾子が苦心して漸くに生計を立てて居られますうちに天保七年の大饑饉がありました。さらぬだに世間は當惑の時であるにかねて貧しい人は愈々苦しく餓死するもの日々幾百とも知れぬ位でありました。此の間に處して湯地家の困難は如何計りであつたでせう。殊に祖先代々よりの家財などは悉く保護して決して賣却などはせず、よく節しよく働一家の飢を支へられた津尾子の苦心は推し測るだに感心の至りであります。後に暉狼が此の時の母の恩を忘れぬが爲にとて記し



置かれたものがあります。

一大豆飯 一ごんぐり飯 一葛根團子

一米粉一杯、小麥かす一杯、糠一杯を合せ團子としてくふ。

一床唐芋、いつもは捨て候へども腐り入らぬ所をとりてたべる。

一唐人飯とて米をいり水に一夜ばかりひやし飯にたく。

一あらめ飯

一くさぎの葉おふばこの葉をゆで飯に入れる。

一麥飯などは上々の品に候。

右の品々に米が少し處々につき候位に見候事。

右の仕合に御母様御働き一つにて世を渡り候。前々よりの家具も漸く持届候も御母様ならずして外人にては容易に出來がたき事と相考へ候事。

尙此の饑饉につき藩主細川侯より貧困の者に救助米を下されることになりましたのであります。が、何にしる不時に備へる貯蓄の古糶のことでありましたら、大抵はしられて正實少くなつて居りますのに、湯地家に賜はりしものは偶然にも他に比べ

て實入多かつたので、土地の人はこれ津尾子の徳天に達したものだと思つて涙をながして感じあうたさうであります。

赤心天に通じて湯地家の歸參叶ふ

天道は人を殺さずとかや、津尾子の善行はいつとなく村中の評判となり、近村に傳はり、名聲は段々と所々方々に傳はりましたので、つひには藩主細川侯の御耳にまで達し、吾が領内に此の如き賢婦人のあるはげに一藩の名譽なりと仰せられました。饑饉のあつた翌年即天保八年七月二十四日津尾子の善行を賞する爲にとて、元通りに扶持米を賜はる事、且又熊本に歸るべき旨御沙汰があつたのであります。顧りみれば、あられもないことより多年流浪し不自由な片田舎に寂しき月日を送つて居られた津尾子刀自の感慨如何許りであつたでせう。再熊本藩士として城下に歸られる嬉しさは誠に喩へやうもなかつたことでありませう。

村民津尾子の徳を慕ひ別れを惜む

愈住み馴れた佐敷の地を引き拂つて熊本に歸られることになつてみれば、又離別の情禁する能はざるものがあつたに相違ありませぬ。殊に村民は母に別れるが如く



に非常に名残を惜んだと云ふことであります。津尾子が此の地に居られた折には生活の助けとして養蠶をなされたことがありますが、村人は津尾子の我が身を忘れた勤勉とけなげな振舞とに感じて、山などに草刈にゆく途中に桑の葉を持ちゆき入口より投げ込んでゆくと云ふ如き有様であつたと云ふことであります。又村民の間には何か争ひごとでもある場合には津尾子の面前につれ來り双方を和解せしめるをきまりとして居つたと云ふが如き、如何に時代が質樸であつたとは云へ津尾子の徳望が非常なものであつたと云ふことが分るのであります。此の如き有様でありますから愈別れとなつては其の徳を慕ふ人があちこちより津尾子を招き心からのもてなしをしたので出發の期が三月計りも遅れたと云ふことであります。如何に津尾子が他人から同情を得て居られたかがわかります。さて湯地家一族は佐敷より今の飽託郡黒髪村の竹部と云ふ所に移り居られることゝなりました。其の後二十三年を経て村の招きにより津尾子が此の佐敷へまゐられました時は死んだ親にでも巡り逢ひしが如くに非常に悦んだと云ふことであります。

一藩中の女子の模範となる

津尾子は熊本へ歸られてからは其の徳望愈高まり前にも一寸申し述べましたが長岡監物と云ふ賢大夫は津尾子の善行貞節を感賞せられ、毎年米五俵宛を送り又常に其の別邸採釣園と云ふに招きて一家の婦人達は云ふ迄もなく其の家臣の女子ども百餘人を集めさせて女の心得を講釋して津尾子を模範とすべしなど懇に諭し居られたさうであります。何と名譽の至りではありませぬか。

夫龍彦氏讒にあふ津尾子夫を思うて板の間に臥す

湯地家はかく津尾子の善行によつて積年の希望を達し榮える機運に向ひ一家の喜び云ひやうもない程でありましたが満つれば缺ける世の習ひ天保九年に夫龍彦氏は不圖悪徒の爲に讒誣せられ未決監に拘留せられる身となられたのであります。昨日の喜にひきかへ今日の悲歎誠にやる瀬もない次第であります。津尾子は牢中の夫を思ひ夜分などは殊更に板の間に臥せられたさうであります。それも一夜二夜のことではなく三年の長い月日を左様に勤められたと云ふことです。夫を思ふ津尾子の心中を察しまして覺えず涙を催しますのであります。

父は牢中に病み子は身を挺して看護せんとす



かくまで津尾子の心を痛めて居られるにも拘はらず不幸の上に不幸は重なり、夫龍彦氏は牢獄の中で重い病にかゝられたのであります。此の時暉狼は二十歳の壯士、前にも述べました通り津尾子の非常に懇切な教養により其の後學問も進み人物も大にすぐれ名も丈右衛門と改めて立派な士となつて居られた時でありますから、母の此の頃の心配や父の病體を思うてはごうしても家に留つて居ることができません、自牢屋に入つて父を看護し是非とも健康の體にしたいと覺悟をきめて度々其の筋へ願ひ出でられましたけれども、おきての定むる所又如何ともし難くそれはついでせう。そこで又丈右衛門氏はせめてもと思はれ、朝夕冷水をあびて神に祈りを捧げ父の病の平癒を祈られたのであります。これを密に聞かれた龍彦氏は身の不徳と太く悔いられたと云ふことであります。天保も十一年となり龍彦氏の疑もはれてやう／＼出獄を許され本の身となられました。實に此の間母子の歎き日夜の辛苦は到底他人の想像の及ぶ所ではなかつたと云ふことであります。

藩主母子に褒狀を與へて其の行狀を表彰す

出獄後龍彦氏は兎角に健康すぐれず、津尾子母子の折角の看護も遂に其の効を奏せず、天保十三年五十二歳の盛りを名殘として永遠の旅へ赴かれたのであります。母子の悲嘆は云ふも限りなく、生前には放縱豪俠なる夫を扶けて一度も其の意に逆ひしことなくひたすら丁寧に事へられた津尾子は、又夫の死後の追善極めて篤く人々其志を感せぬものはなかつたと云ふことであります。翌十四年人々其の母子の節操孝養を稱揚し同年十一月十八日藩主は左の如く賞して其の行狀を表彰せられたのであります。

丈右衛門母儀夫存生中事方宜敷死後追善も厚且又姑へも能事子供教育も行届候様子委敷達 尊聽奇特之儀被 思召上候依之目錄之通被下置旨被仰出候以上

目錄

御紋附御小袖

一

又丈右衛門氏へは

右者父存生中事方宜敷死後追孝も厚且又母並祖母へも能事候様子委敷達 尊



聽尤之儀被 思召上候此段可申聞旨被仰出候條丈右衛門へ可被申渡候以上

天保十四年十一月十八日

定めて母子は藩主の恩寵を忝なく拜受せられたことでありませう。

夫の不名譽なりとて容易に拜領の紋服を着用せず

御紋服とは藩主の九曜紋なり、女にして紋服を與へられるは實に殊榮でありまして、之を拜領した津尾子の名譽はいかばかりかしれません。しかし津尾子は此の紋服を滅多に身に着けられたことはなかつたさうです。何となれば、自身が名譽は取りもなほさず夫の不行狀を告白するに均しければとて殊更之を着用することを辭せられたと云ふことです。何と奥ゆかしい心がけではありませぬか。死せる夫も嘸や其の厚意を感受せられたことでありませう。

丈右衛門氏湯地家をつぐ

龍彦氏を失ひました湯地家は誠に悲しいことで御座いました。しかし立派な暉狼の丈右衛門氏があつて父の跡をつがれることに依て幾分減することが出来たでせう。丈右衛門氏は時に二十五歳であつたさうです。

物覺え悪しかりしことも昔のことなり、母に迄死を覺悟せしめし身の不逞も先年の夢なり。丈右衛門氏は前にもありましたがやうに藩主より賞狀を受けられた程の御方でありましたから、人物學問共に不足なく、やがて時の藩校即時習館の先生となられました。

近頃まで侍講を勤めて居られました故樞密顧問官元田永孚先生は丈右衛門氏と親しい交を結んで居られた方でありますが、此の方が丈右衛門氏を德行學問共にすぐれた人として、純乎眞君子似、茹秋實飲醇酒とまで批評せられて居ります。八歳より十四歳迄親しく丈右衛門先生の教導感化を受けられた村上楯頼(福島縣の書記官を勤め後警視廳第一部長の職にありし人)氏の御話によりますと、丈右衛門氏は眞に言行一致の士であつて決して高祿を欲せず、克く子弟を導き親切に教へられたから門生集ひ來つて常に百を下らず、爲に住宅の各室皆教場にあてられたと云ふことであります。又村上氏が十四五歳の頃丈右衛門氏は竹部から城下の内坪井と云ふ所へ移られました。これも長岡監物氏が氏の講義を聽きたきも竹部は不便なりしが故に切に轉地を勧められた結果であると承りました。



これにても丈右衛門氏の人望を窺ふことができるのでありますが、又斯様に立派に子を育てあげた津尾子の満足はいかばかりであつたでせう。津尾子は時機をみて丈右衛門氏に嫁を貰はれましたが、夫婦の間嫁姑の中至つて睦じく人の羨む程であつたと云ふことです。

間もなく丈雄恒雄の二人の孫も生れ一時湯地家は萬歳の有様でありました。

津尾子の還曆祝

安政三年津尾子は六十一歳になりましたから、丈右衛門氏は盛な賀筵を開いて勞苦多かりし母を慰められました。此の折監物氏の姉君もと子の方は老松白鶴の圖を畫きて贈られ、又諸方より祝ひ喜びの歌など澤山寄せられたさうです。其の中の二三をあげますれば

澤村 武則

雨をしのぎ風にたへにし宿の松かねて千とせの色やみすらむ

高田 利友

この本の道ゆく人もことほぎて千年をまつのかげたのむなり

久野 正頼

たぐひなき操をよみに顯はして道あるみ世にあへる老松

丈右衛門母に先き立つ

津尾子は丈右衛門氏が前から述べましたやうに孝心深く、且は藩の師表と仰がれるやうになられたのを此の上もなく喜び老後の慰として居られたのでありましたが運命と云ふものは致し方のないものでありまして、津尾子が杖とも柱とも思はれた一人息子の丈右衛門氏は、病の爲に萬延元年六月二十六日四十三歳を一期として死去せられました。なんと味氣なき有様ではありませぬか。

しかしさすがに賢夫人であります。まさに入棺して蓋をなさんとする時、丈右衛門氏の死體に向つて嚴かに云はれるやう

「丈右衛門よ、丈右衛門よ、汝は老母と子供とを遺して、いかに悲しく思ふらむ、されど今はゆめ／＼思ひのこすなよ、汝が愛子の教育はこの老母が引き受けたるぞ」  
など、いと痛切な言葉に満座の人々何れも袖をしばらぬものはなかつたと云ふことです。此の時座側にあつた甥の高原淳次郎と云ふ人は、之にたへかねて後より抱き



止め強ひて元の座につれゆかれたと云ふことです。また何と悲惨な物語りではありませぬか。

雄々しくも亦孫の教養を主る

津尾子は丈右衛門氏の棺に向つて誓はれた通りせめてもの心やりに其の忘れがたみの丈雄、恒雄の二人の孫を教養せられて居りました。雄々しくもまたいたはしいことではありませぬか。明治六年丈右衛門氏の室山口氏も先きだたれましたので、やがて八十路に近い老軀を以て再せちがらい家政の整理をもせられねばならぬに至つたと云ふことです。天はごここまで貞婦の力だめしをするものにや。

西南戦争

明治十年西南の役がありました。津尾子の居所は丁度戦場の真中になつて居りましたから、彈丸雨注の間をくぐり天にみなざる火炎の中を避けなごして野宿の難儀をせられたこと幾度かしません。曾て天覽を賜はりし加藤清正公の征韓旗なる、七字題目僧日蓮の自署ある紅緒白字の靈旗は、家財悉く焼燼の中を津尾子が身を以て持ち退かれましたもので、今に湯地家に保存せられてあります。まことに雄々し

い氣象で八十一歳の老嫗のしうちとは如何にも思へなかつた程であつたと云ふことです。二人の愛孫丈雄、恒雄の両氏は官軍に従ひ、甥の佐々干城、友房の二人は敵軍に屬して親族互に敵味方の間に居られました。津尾子は其の何れに屬するかを知らず、袂別の宴に臨み各忠義を盡さんことを祈られたと云ふことであります。

津尾子名古屋に來らる

西南の役の前年、丈雄氏は己に我が愛知縣に奉職して居られたのであります。所がこの丈雄氏(目下麴町區富士見町五丁目七番地)は幼い時に父上に分れられた不幸の御身でありますけれども、津尾子の遺憾なき教育をうけられた丈ありまして、非常に忠君愛國の念強く、さきには有名なる元寇記念碑を博多に立て、今は護國幼年會なるものを起して愛らしき全國の兒童の真心より出づる貯金を以て水雷幼年號を造り、國家に捧げて一朝の用に供せんと日夜寢食を忘れて盡力せられ居るやうな感心な御方であります。又孝養の志深くして平素よりごうにかして老後の祖母を慰めたいと思つて居られましたから、名古屋より態々熊本迄津尾子を御迎ひにゆかれました。津尾子は切な孫の孝心に感せられ、老體を押しなつかしい故郷の空を後にして



この名古屋へまゐられたのは明治十年六月のことです。

つとめて服薬して孫の孝心に報ゆ

名古屋へ御出でになつてから間もなく病にかゝられました。されば丈雄氏始め家内一同の方々が大變心配せられ、心限りの看護をされて平素の高恩に報いんことに勉められたのであります。津尾子は在來服薬せられたこともなく、又服薬は欲せられない性質の御方であつたのでありましたが、此の度に限り人々が多すぎると思ふ程につとめて薬を召上がられますので、丈雄氏は不審に思はれ其の趣を尋ねられます。我老いて命を惜むにもあらず、しかし折角に御前達が此の地迄呼びよせたは全く私に孝養を盡したい爲であるに、いま此所に來るや間もなく病の爲に死に果てることゝならば御前達の志も水の泡となり定めて遺憾であらう、又親戚の者などより長い旅を無理したからなど思はれては、いかにも御前達の孝心に對して氣の毒であり又残念でもあらう。それがいとほしさに苦き薬も飲み今しばし是非生き延んど思ふ許りなり……」と申されたさうであります。丈雄氏は祖母が加程迄も我等のことを思うて下さるかと思つた折は、嬉し涙と悲みの涙とが交々至つて禁じ得られませんでした。イヤ今日でも其の時のことを追想すると感慨胸に迫ると、涙を浮べて御話なさるさうであります。

津尾子其の死を卜知す

丈雄氏の弟恒雄氏は、西南の役には本營附として出陣せられて居たさうでありましたが、まだ軍旅中に祖母の病をきかれて、程を見計ひ急ぎ看護の爲に歸られたのであります。此の時のこと、津尾子は病床に呻吟しながら丈雄氏に向ひ「弟恒雄は袴をもたぬではないか……早くこしらへてやれ」と再三催促を致されたと云ふことでもあります。蓋遠からぬ自の運命を卜知せられて居たが爲であつたと云ふことです。

女丈夫も遂に起たす——新出來町徳源寺に葬る

丈雄氏一家の有らむ限りの心づくしも定まる壽命はいかむともしがたく、萬障百難に屈せざりし稀世の女丈夫津尾子も、遂に明治十年十二月十一日敢へなく亡くなられました。嗚呼悲哉。

丈雄氏は今は何と繰り返すも詮なきこと、此の上は亡き後の追善供養こそせめても御恩返へしとて、名古屋新出來町の徳源寺へ手厚く葬られたのであります。今よ



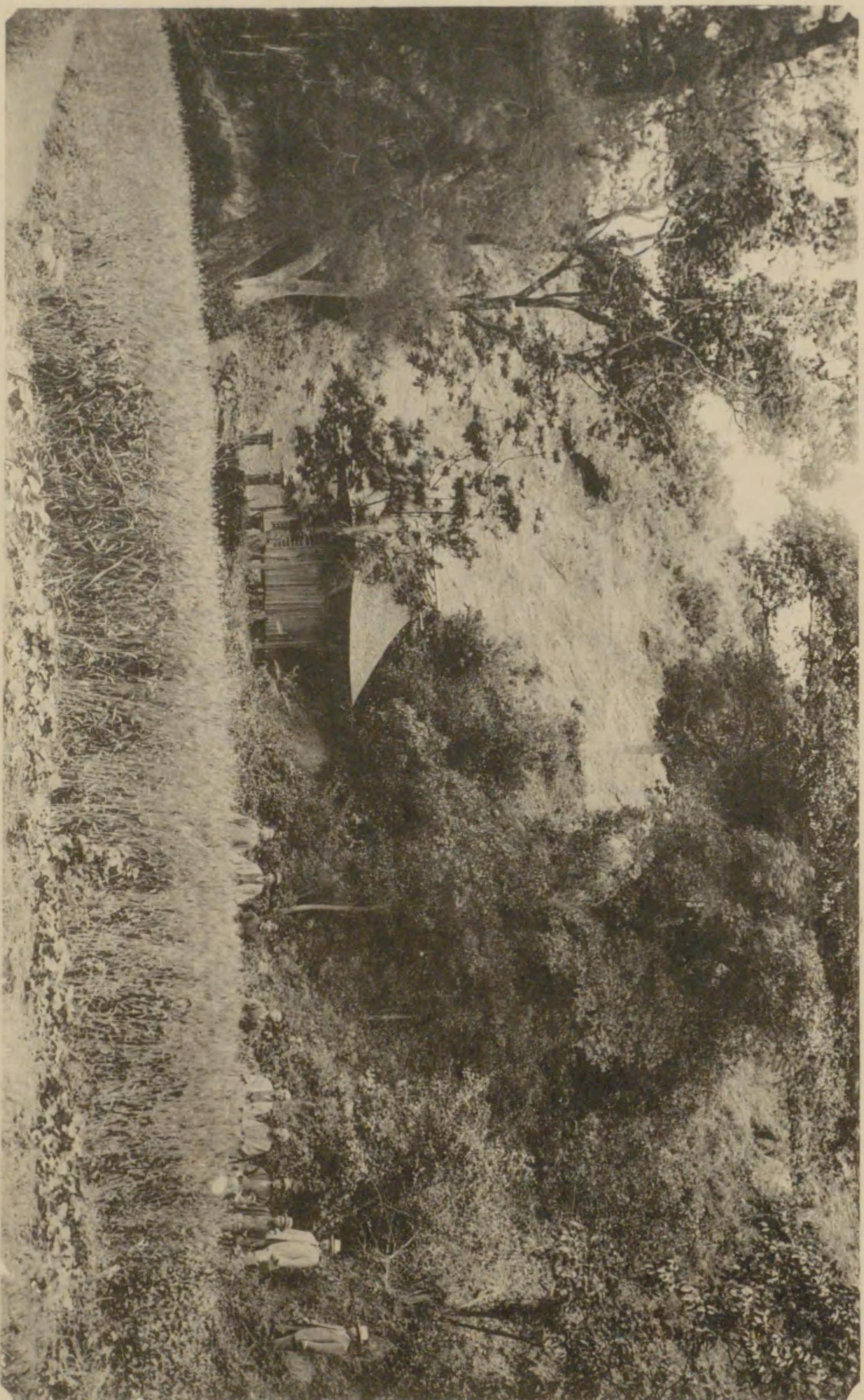
り三十一年前の今月のことです。

曾て長岡監物氏は、津尾子を孟子の母にたくらべ婦人の龜鑑なりと嘆賞せられ、又曾ては故井上文部大臣は丈雄氏に書を送つて「御先大妣夫人の御懿德三誦し後感涙に堪へず候」と稱せられて居るのでありますが、今刀自の傳記を偲ぶに當つて益々其の善行遺徳の大なるを感ずるのであります。女徳漸くすたれて又寒心に堪へざるものあり、志ある者誰か徳源寺墓畔に女史を弔ひ其の餘徳に浴せざる、榮良院松室貞操大姉の碑は金甌の輝きと共に永遠に其の光を放つて居るではありませんか。

(明治四十一年十二月十一日稿)

湯地津尾子刀自徳源寺瑩域の碑文 (時の愛知縣師範學校長境野熊藏氏撰)

孺人齋熊本藩士佐々丈右衛門二女寛政八年三月廿三日生長男丈右衛門先死初遭家難貞操耐專盡心於家訓有烈婦之名因受藩主之賞賜西南之役家復罹兵燹孫丈雄奉職於愛知縣第三區々長乃行迎于名古屋居七閱月罹病而歿于時明治十年十二月十一日年八十一葬新出來町徳源禪寺僧諡曰榮良院松室貞操大姉



湯地津尾子宅の址



## 賢婦人の跡を訪ねて

### 緒言

私が本校に就任したのは明治四十年三月四日でありました。時恰も日露戦役後でありまして國民として又國家としてそれ〴〵世界に於ける新機運に向ふ我帝國の大方針を自覺致しまして各自進まなければならぬ誠に大切な時代でありました。然るに國民は戦勝の餘威を受けましてともすれば漸く華美に惰弱に流れんとする良くない傾向のありました際で御座ります。夫れで私は此時代の思潮に顧みまして本校訓育の綱領を定め一面には質素勤勞の徳を誨へ他面には模範婦人の善行を示すことに致しました。湯地津尾子を本校の模範婦人に推舉したのは實に明治四十一年十月二十一日でありまして 明治天皇が戊申詔書を煥發あらせられて私共國民に方今の世局に對して向ふ所を御示し下さいました誠に忘るべからざる出來事のあつた翌月で御座ります。

世上模範婦人を推舉することに就ては種々異見もある様であります。がそれは立場の相違にすぎません。當時私共は妻として母として又主婦として更に又姑として何れの方面より見ましても世の範とするに足るべき婦人を見出すことに就て少からず配慮致しました。就任以來一年有半漸くにして稀世の賢婦人たる湯地津尾子を知り得ま



したのは少くも當時に於ける本校訓育施設の立場より申しまして本校の仕合とする所でありました。早速市内主税町に居住せられます孫の恒雄さんのお宅や刀自の墓碑ある新出来町の徳源寺に参り段々各方面の調査に従事しまして一通り刀自の徳操事蹟を知るに及び眞に本校生徒の模範婦人として否々我帝國婦人の模範として推擧すべき立派なる御方であるとの信念を得たのであります。そこで前に述べました通り明治四十一年十二月十一日刀自の記念すべき命日に於て之が推擧の式を擧げたのであります。前編に掲げし湯地津尾子の傳は當時の講話の大要であります。爾來私は津尾子の精神の擴充に専ら意を注ぎました。幸に職員生徒の協力一致によつて今や一千四百二十一名の卒業生六百五十名の在校生はよく刀自と精神上の交通を謀り何れも津尾子の精神を身に體しつゝありますことは私の最愉快に最満足に思ふ所であります。

斯様に刀自の精神が行き渡り年と共に我學校の最強き訓育上の力となりつゝあるのを見まするにつれ私は常に刀自の出生地である熊本縣佐敷の地を訪ねたいと思ふ念慮は一日も止みませぬ否始めて刀自を知りました其時からの切なる願ひをして之は私獨りの心のみでないと思ふ。然るに今回茲に十餘年以來の遺憾を取り除く機會を得まして私は卒業生在校生二千餘名の代表として刀自の舊地を訪ふべく名古屋を出發しましたのは本年五月二十一日のことであります。一同の喜び到底此處に表すことは出来ませぬ。

### 佐 敷

佐敷は熊本縣の西南隅にある一僻地で熊本から汽車にて四十哩程南白石と名づくる停車場から四里西へ這入つた處であります。汽車が熊本を離れて白石に近づくに従つて日本急流の一たる球摩川の岸を走るのであります。此邊は九州山脈の餘波が一帶に起伏して居りますので所謂斷崖絶壁誠に風景の宜しい處であります。白石から佐敷へは道路甚嶮岨交通極めて不便であります。ガタ馬車に乗りました私共は激しい動搖の不快に襲はれつゝ、一步一步山又山を越えて進みました。時を経ること四時間漸くにして多年の宿望たる佐敷に着きました。

豫て僻陬とは承知して居りましたが來て見れば又想像以外でありました。見渡します處東西南北山を以て圍まれて居ります。只其中を佐敷川が流れて西南端に八代灣に通ずる口を開いて居るに過ぎませぬ。まるで摺鉢の底の様に感せられる。然し私には此山も此川も又此處の人々も永年別れて居た友に出遇ひました様に懐しき感を以て迎へられました。そして流石は稀世の賢婦人を生んだ土地として相應はしい感が出て参りました。尠からぬ欣快の念に堪へませぬのでした。

明治維新迄は此の地より熊本へ出づるには俗に三太郎と稱する佐敷太郎赤松太郎と云ふ二つの險阪を越ねねばなりません。又鹿兒島へ向ふには津奈木太郎と申す是又三太郎の一たる峻阪を通過せねばなりません。夫れ故鹿兒島から陸にて熊本へ上る



ものは是非共此三險を踏破せねばなりません。若又海にて渡らんとしますれば佐敷川の河口にある計石番所の検査を受けねばならぬ。斯様に薩摩に對しましては要害堅固な處で而かも其動靜の見張所であるから古から薩摩押へと稱し國境の要所として番代が置かれてあつたのであります。斯かる處に居た士は何れも何か一癖あるものか然らざれば何か申條のあるものが詰り替へられたものであります。士分として二十五人下役四百三十人程居りまして其任に當つて居りました。役所は海に面せる計石にあり住宅は佐敷にありまして之から計石へ通つたものであります。

今日の佐敷町は所謂佐敷計石其他數區の合したもので戸數一千六百四十二であります。葦北郡役所の所在地で警察分署も置かれ小學校も四つあります。電話も設けられ近く水力電氣の敷設竣成して電燈等の便益も受くることになつて居ります。然し嬉しいことには未だ文明に伴ふ惡風は吹き込んで居りませぬ。

私は其處の町長郡視學小學校長の諸氏と町内を彼方此方に往來致しました。實際學校生徒は申す迄もなく其地の青年と思はるゝもの又は一家の主人主婦までが戸口迄出でまして「毎日御苦勞様」と丁寧に辭儀せらるゝのを見ました。側の町長さんが此土地のものはまだ淳朴の風が残つて居りまして上のもを立てる美はしい處があります。又私共は津尾子刀自に縁故ある土地の古老數人に面談するの機會を得ました。夕方宿へ歸りま

す時に郡視學さんが山腹に見ゆる燈火を指して彼れは此邊の墓地であります。墓地は常に極めて清潔に保たれて居ります。彼の燈火は死人埋葬後六十日乃至八十日間其の家族のものが風雨寒暑の別なく燈火を點じて追悼の誠意を捧ぐるのであると承りました。一體佐敷町にて重きをなす字は所謂佐敷と計石とである。佐敷は前に述べました通り古は一癖ある士族達の居た屋敷のある處、計石は一寸した港にて多數の漁民の住居する處、然るに面あたり此の朴訥にして淳厚なる人情風俗に接しまして私共は何となく津尾子刀自に敬意を表せざるを得ない感が起りました。

### 津尾子の舊址

津尾子は光格天皇の御宇寛政八年今より百二十三年前此佐敷の地に於て呱呱の聲を擧げられたのであります。津尾子が成人時代は勿論彼が龍彦と結婚後柔順であつた花嫁時代もかの士族屋敷に住居せられたこと、思はれますが然し今日は其の何れの場所たるかは分りませぬ。津尾子が漸く家風に馴れ今や妻として母として充分に責任を果し得る時偶夫龍彦は事によつて知行を召し上げられ浪人の身となられました。憫れなる湯地家一族は住み馴れた士族屋敷を去つて計石の吉津治左衛門氏の隱宅を借りて居住することになつたのである。そして此隱宅こそ稀世の賢婦人が十三年間あらゆる艱難に堪へあらゆる困苦と戦ひよく日本婦道を發揮して女子としての職分を完うせられました。誠に光輝ある場所であります。こは文政八年のことで夫龍彦は



三十五歳津尾子は三十歳千代子は十歳暉狼は八歳にて上林先生に入門せしめられし翌年のことであります。

隠宅は今日はありませんが幸に古老の方の指圖によりまして其の宅地のあつた所を知ることを得ました。計石の東南隅佐敷川の沿岸近き所にありまして僅に百坪足らずの屋敷であります。後は五十間も高き屏風を衝き立てたやうに峻はしい山を帯び前面は幅三尺許りの山道が東から西に走りて佐敷川の堤防である人吉街道と村下新田(約二十町歩)を包みまして平生嶽湯治山と相對して居ります。西は神々しい春日神社に隣りして居ります。そして其西北三十間程の處に湯地家の使用せられた井戸がある。古老は申して居られました。

私共の參りました時は青々として一面に麥が柔かな穂を出して居ります。其間に蠶豆が豊かなふくらみを持つた莢を鈴なりにして居ります。そして初夏の細雨に打たれて居ります。今私共は賢婦人が活動せられし其の場所に古老と共に立つて居ります。私共は私共の足跡を此地に印すことが何となく勿體なく感じられます。そして神々しき高所より低き濁れる社會を達觀して居るかのやうな崇高な感に打たれました。

家庭の神聖は邸宅の宏大狹小に關係するものでない主婦たる婦人の如何にあることは古今を通じてのことです。然るに世の多くの婦人が日夕富とか權勢とかに憧憬して益其神聖を汚しつゝあるを思ふにつれ私は尾子が僅に雨露を凌ぐに過ぎ

ない茅屋に於てよく家庭の神聖を遺憾なく發揮せられましたことを感激せずには居られませんでした。

後方山腹の根下に梅の古木がある。古老は此古木が湯地の邸宅の標だと言はれる。霜雪の苦みを凌ぎし古木百花に魁けして芳香を放ちし古木古木にはあらで賢婦人津尾子の如く思はれて何となく懐かしいのである。津尾子が死を以て暉狼を誡められし處も此古木の邊りにやなごゝ思ひは其れより其れと馳せて自然と頭が前へ垂れるのであります。そして私共は此處にあつて古老から交々尊い話を承るのであります。

### 古老の逸話

(一)

古老の一人は言はれる。此山腹の頂きに一の馬場がある。正月十四日には年々佐敷在住の士の競馬が行はれます。或年丈右衛門の暉狼は稽古の歸り此の競馬を熊笹の中にあつて見物して居られました。自分も斯くありたしと思へば悲み身に迫つても其處には居溜らず泣きながら中途宅へ歸られました。津尾子は常にない暉狼の様子を口惜しく思はれ静に涙を拭はせ更に衣を改めさせまして自分も共に再び馬場に至り競馬を見ながら母が日頃の心盡しを語られたと云ふことである。何と有り難い話ではありませぬか。



## (二)

湯地家の宅の後は直ぐ山で家の後には二抱もあるたぶの大木があつた。中がうつろで何か怪しいものが棲んで居るとの評判が村中に廣まつて女小供等は日暮から先は通らなくなつた。それを聞いた津尾子は毎夜深更人知れず大木の側に佇んで遂に動物の居ることを確め附近の壯者をして捕獲せしめられました。が俗に云ふ「モマ狸(ムサビ)であつた。それで皆が安心しましたが流石は刀自の仕打と稱せぬものはなかつたと云ふことである。

## (三)

津尾子は無口の人であつた。然し言ふ事だけは正しく言はれたものである。誠に丁寧親切であつて無駄言は一言半句もない静かな人であつた。計石の如き漁民の多い處では時々争がある。争が治まらないと何時も「どうか御立會を御願ひします」と言つて其捌きを附けて貰つたものである。或時計石村の半兵と云ふものゝ娘の事につきて村中が動搖を來す程の悶着が起きた。お寺の住持が色々骨を折つて見ましたがどうしても納らない。遂に津尾子の處へ持込んで御世話を頼むことになつた。そこで津尾子は半兵の宅に參られますと半兵はお茶を出して歡待しました。津尾子は半兵に向ひお茶も戴きませうが實は今日は少し相談の筋があつて參りました一つ私の相談を聞いて呉れまいかとのいと打ち解けた挨拶に次で

宇治は茶所茶は縁所娘やりたや婿ほしや

と云ふ歌もある此處の娘さんも早年頃だから今戴いたお茶を御縁に娘さんを是非私に下さる様願ひたしとのさつぱりした相談に半兵は雨後の晴天の如く日頃の怒りも打ち解け即坐に承諾致したのでさしもの問題も圓く納まつた。津尾子も事に當つては斯様なこともあつたのである。如何にも聲望の高かつたことが推知せらるゝと共に津尾子の圓熟せる性格を窺ふことが出来ると思ふ。古老は白岩と鶴來山と申す字を指してあの字の入り組みの時もやはり湯地のお袋さんに治めて貰ひました今も湯地のお袋さんが居たならば圓く治るだらうと私共の中には度々話し合ふことで御座ります。がまあ斯う云ふ人は生佛で御座りましやうとて尠からず感激に堪へざる面持であつた。

## (四)

暉狼の驍方については随分喧しくあつたこの事である。「士と云ふものは道を歩くにはずつと真直に行くものだ」と何時も口癖のやうに言はれて暉狼が眼をふらして歩くことがありますが常に厳しく誠められたと承りました。が軍隊教育の眞髓は眼を正しく保つ不動の姿勢にあると承知して居ります。私共は津尾子がこの道の歩き方によつて暉狼の武士氣質を養成せられた精神には敬服せざるを得ませんでした。

## (五)

湯地のお袋さんの苦勞と云へばとても御話になりませぬ。私共も毎日の床唐芋や麥などを持つて行つたものであります。お袋さんは毎夜帯も解かずに丸寝して働か



れ殊に裁縫は名人と言はれる程上手でありまして賃仕事などして湯地家を支へられたなご古老の御話を伺ふにつきましても當時湯地家の常食であつた「どんぐり飯」葛根團子など思ひ起され其邊りに生へて居りますオホバコやクサギの葉なども何となく貴い感じが致しました。津尾子が熊本へ歸られます時先きの恩義に報いんとて床唐芋など持ち來りし田中新平や田中辰之助や雇女りうを連れ來り我家に置きて教育せられたと申すことであります。

## (六)

私は辰之助氏の尊い仇討のお話を承りました。お子さんの言はれるには私の父が亡くなつてから丁度今日で十七年になります。父は誠に言葉の少い極篤實な人で商賣をしまして五錢で買つたものを五錢で賣るといふ風で儲けたことのない人でありました。幼少の時は湯地家に寄寓して湯地のお袋さんや丈右衛門先生から指導誘掖を受けましたものであります。が江戸に出で、御留守役吉田平之助氏の若黨となりまして。文久二年十二月主人吉田氏が事により同藩黒瀬市郎助等の爲に重創を負つて不慮の最期を遂げられました。父は深く之を嘆き遺子吉田傳太氏を助け主人の仇を報せんとて身を商人の體に變じ江戸大阪を始め各所を探索すること七ヶ年遂に明治元年二月三日豊後の鶴崎龍興寺に於て首尾よく主人の仇を討ちましたので吉田家は芽出度再興せられ父は一領一疋の士籍に列せらるゝことになりました。誠に嬉しいことであります。父が戴かれた書附を示されましたが私共は辰之助氏の爲人を推察すると共に津尾子が一段と尊くなりました。

## (七)

此處に又私は雇女りう女につき二三を記して見たいと思ひます。りう女は幼少の時から湯地家に出入したのみでない熊本へ連れられました。より多年親しく刀自の指導感化を受けたものであります。其後古井家へ嫁し八十五歳にして亡くなりましたが夫は大酒の癖があつて疝癪醉狂珍しからぬ程であつたが如何なる乱暴に對しても不快の顔や高らかな言葉は出たことはいない。七十歳迄は一家の炊事は全く一身に引受け晩年の十四五年は失明して居ても一日も無駄に送られない。殊に心身老衰後も終日端座し假令板の間椽側にも湯地のお袋さんの教に背くこと座蒲團すら用ひたことはなく又足袋を拵へ家人に與へても自分は一度も生涯に用ひた事はないと云ふことでもあります。りう女は勿論無學であつたが小倉百人一首や義士十二段の大津繪節など残らず諳んじ何時も女大學を引合に出して自分の嫁などを教訓して居たことであるが之も津尾子より夜なべの間に授かつたと云ふことです。村内一般の尊敬を受けて實に小津尾子と言はれる程で津尾子の精神を最多く體得したものの一人であります。

## (八)

其後津尾子が佐敷を見舞はれました時には皆のものゝ喜びは一通りではなく津尾子の行かれる處へ寺の説教でも聽聞する様に後を追ひ色々の御話を承つたものであり



ます。熊本へ歸らるゝ時一同心ばかりの餞別として夫れ々綿を贈りましたが其れが積つて船一杯となつたことでもあります。孫の恒雄さんも幼な心に其綿が裏の倉に積まれたことの記憶が残つて居るとの事でもあります。

(九)

湯地家の屋敷の東南に聳ゆる山を城山と云ふ。立派な山である。古へ佐敷城のあつた所でありすが。其山つゞきに大變名高い官山がありました。今日の御料林の如きものであります。古老は私共に向つて湯地のお袋は誠に美しい人でありました。土地のものは此官山と湯地のお袋とどちらを貰ふかと言ひ離した程評判の美人であつたと申されました。定めし人並勝れた美人であつたでしょう。然し此評判は所謂顔貌が美しかつたと云ふのみでなくてごちらかど云へば心ばえの人並勝れたことを稱へたものと思はれる。私は此話が今迄色々伺ひました凡ての話を包括する最よいものと伺ひました。文政八年津尾子が隱宅へ移られましたから十三年間氣の荒い言はゞ變り者であつた夫龍彦には何一つとして不快の顔を見せずに愈同情し人並勝れた嚴格な姑には益從順によく貧苦の中にあつて子女の教育さへ完うせられました徳操に想到しまして覺えず感泣した次第であります。

### 上林先生と佐敷川

上林先生の住宅は佐敷の谷と申す處で後は竹藪深き山を帶んで居ります。今は警察

官吏の住宅で以前の建物でない。然し畧當時の模様を察することが出來ます。宅は東向で前より西へかけた庭園を生垣が取り廻して居る。そして其生垣に沿うて細き小徑がある。思ふに津尾子が籬側に立ちてまはらぬいろは以て論語十卷を寫し取り暉狼の復習の資に供せられたと云ふ尊い教訓は此生垣に沿つた小徑であつたらうと思はれる。計石の隱宅と上林先生の宅との間には佐敷川が流れて居る。隱宅より此處迄は表道路なれば一里に遠く。裏道なれば一里に近いが佐敷川を渡り其岸を辿り城山に沿ふ小徑で今尙淋しい處である。佐敷川は幅が百間もあるが然し上流は十間にも足りない流れである。平素は一面積で誰も自由に渡ることが出來る。津尾子は常に此裏道を十間二十間暉狼より後に見え隠れについて往復せられたのである。牛若丸を例にとりての教訓も此裏道のことであつたらうと思はれる。暉狼が上林先生に入門を得たのも此佐敷川の沿岸のことであつたらうと思はれる。然し天保九年熊本へ移られせられてから幾年間其教育を受けられたかは明でない。然し天保九年熊本へ移られる迄永年師事せられたことと推知することが出來る。上林先生の名は甚十郎と云ひ誠に穩な人で地行百石を戴き最初は蘆北郡田の浦御番所詰であつたが後佐敷御番所へ轉じられたのである。士族組頭を勤められ勤續二十五年に及び藩侯より木綿九曜御紋御羽織を頂戴して居らるとのこととあります。先生は極めて能筆で學問あり頗る子弟の教導に熱心で朝夕四民の子弟を集め常に忠君愛國の道義を講じ暇あれば手習讀書等を教授して居られました。そして八十五歳の高齡を以て亡くなられまし



た目下御孫さんは熊本に居住して居らるることでありますが不幸にして面會する機會を得なかつたのを誠に遺憾に存じます。

### 湯地家と佐々家

私は佐敷への往復共に熊本へ立寄りしました。熊本は申す迄もなく津尾子の後半生の活動場で津尾子が妻として又姑としての本分を果された場所である。そして津尾子に撫育せられました孫の恒雄さん並に佐々干城氏が居住して居らるるからであります。

#### 一、孫 恒雄 氏

恒雄さんは皆の承知の通り丈雄さんの弟である。父の丈右衛門氏の亡くなつた時は丈雄氏は十四歳恒雄氏は七歳でありました。津尾子が名古屋へ來られました時は丈雄氏は已に三十歳で愛知縣令安場保和氏の下で春日井郡の區長を拜命して居られました。恒雄氏は安場氏が曩に福島縣令であつた時養蠶見習の爲に其地へ參られた縁故で津尾子の死去の際愛知縣屬となり専養蠶の事に當られました。氏の話によれば當時愛知縣の養蠶は縣としては最初の試であつて上州邊りより桑苗を取り寄せ桑の伏せ方接ぎ方等から教へたものであつたことでもあります。斯くて氏は九年間我縣養蠶の創業時代に貢獻せられたのみでない明治十三年より自家に養蠶を行ひ其範を示されました。明治二十年松平熊本縣知事の懇請によりまして三年を約して單身

熊本へ赴任せらるることとなつた。然るに三年は又三年となり終に二十年の長きに至りましたので明治四十二年當市より妻女を呼び寄せ居住せらるることになつたこととであります。明治四十一年十二月本校が津尾子を模範婦人として推舉せし際同氏の居室を訪ねましたことがありますが當時夫人清子氏は私共に語つて私は二十餘年間斯様に留守居をして居りますが大婆のことを思ひまして行届かんながら夫の業を致して居りますことであつた。私共は其節秋蠶から成れる種紙の廣き室内に幾千枚と框に掛け並べたものを見ましたが當時私は湯地の種紙は縣下にては實に評判の良いものであることを承知しまして嬉しく存じました。今日愛知縣の養蠶は長野縣に次での生産地であります。そして之が湯地家と尠なからざる關係のあることは又私共の愉快とする所であります。

私は恒雄氏の案内によりまして細川侯の經營で氏が管理せらるる肥後製糸株式會社を參觀することを得ました。參觀と云ふよりも眞に一瞥に過ぎませぬが其經營振が如何にも堅實で又よく凡てが行届けるのを見まして誠に喜びました。聞けば當會社のある所は湯地家の元屋敷で津尾子の活動せられました場所のこととありますが斯かる記念すべき所に恒雄氏の畢生の努力が植ゑ込まれましたのは獨り恒雄氏の爲めに喜ぶのみでなく津尾子の尊き精神の表現と云ふてもよからうかと思はれます。氏は曩に大日本蠶糸會より金杯を賞勳局よりは藍綬章を受くるの光榮を荷はれました。誠に名譽なことと云はねばならぬ。



一、舅 順助氏

湯地家の祖先是豊前國小倉城主毛利壹岐守の家臣にて鐵砲頭を勤め高麗の陣にて戦死した湯地源助氏である。龍彦の父順助氏は湯地家に取つては最勝れた人であつて文武兼備の士であつたことでもあります。肥後先哲偉蹟には氏の爲人を叙して次の如き逸話が記されてあります。

一年君公高覽まししし射手の人々に御鞭を下賜せられました。何れも有難き事とて桐の箱を造り之に納め置きました。順助氏のみは用ふる爲の鞭なればとて馬に跨る度に携へられました。數年の後折れましたので懸て桐の箱をしつらひ大切に納め置かれたと云ふことである。寛政八年順助氏儉約の儀に付君公に上書せられました。其中に夏羽織は虚飾のものに付停止相成たしとの一條があつた。其後數十年廢藩に至るまで熊本藩に於て夏羽織を着した人を見ないのは蓋氏の建白採用の効であらうと申すことでもあります。順助氏の佩刀は木綿糸を以て柄を巻き鞘と共にかす漆を以て塗られたものであつたことである。

之によつても順助氏の立派な武士であり同時に又湯地の家庭が如何に嚴格であつたかを看取するに難くないことと思はれる。順助氏年四十三將に大に爲すあらんとする時一日病を得て亡くなられました。湯地家の爲には申す迄もなく細川藩の爲にも誠に惜しむべきであります。其師境野嘉十郎氏(境野熊藏氏の父)は其墓碑を選び余之を働すること顔氏の子に於けるが如しと記されてあります。

一、姑とも女

順助氏の妻をとと云ふ。順助氏の亡くなつた時ともさんは三十三歳であつた。五十九歳の母と龍彦熊彦二人の小供を引き受け女の手一つで切廻はされた誠に氣丈な婦人であつた。十六歳の津尾子が龍彦に嫁せられた時はともさんは冷かな人情に揉まれ險はしき世情と戦ひ言はば世の辛酸を嘗め盡された三十九歳の女盛りの時で同時に湯地家にあつては家名雪辱の責ある格別緊張した時でありました。ともさんが常に湯地家の家風に馴れしめんと厚い心遣からして津尾子を折檻したと云ふ長い煙管は恒雄さんの青年時代迄家にあつたことでもあります。天保十四年津尾子が細川侯から其善行を表彰せられました其年ともさんは七十一歳の高齡で亡くなられましたが嘸かし喜ばれたことと思はれる。

一、夫 龍彦氏

津尾子の夫龍彦氏に就きて一の逸話を伺ひました。一日氏が佐敷より熊本へ向ふとてかの佐敷太郎の險を越えらるる折柄山賊の一群が火を圍みて旅人の來るのを待つて居りました。氏は其傍に行いて衣を掲げて暖を探らんとて臀部を突き出されました。賊は氏の傍若無人の振舞に驚いて誰も手を出すものがない。此に於て氏は更に放屁して悠然其處を立去られたと云ふことである。如何にも氏の爲人が活躍して居るやうである。これは氏であつて出來るのであるが氏が斯る傍若無人の振舞こそ其一生を通じたもので氏の幾多の災難：：氏よりは寧當然：：もこれから起つたこと



で津尾子の心遣が一生絶えなかつたことであらうと思はれる。

一、息丈右衛門氏

私は恒雄さんの宅に於て元田永孚先生の六友の詩なるものを拜見しました。六友とは長岡監物、横井小楠、下津休也、荻角兵衛、湯地丈右衛門、道家之山のことで何れも熊本藩に於ける當時の傑物で元田先生が此等六氏の人物を評せられたものである。今之を掲げて見やう。

有友々々有六友

米卿碩德與學富

津公長者汎愛才

恢廓者是橫時存

決難解疑如剖瓜

揭綱張目無遺漏

湯子純乎眞君子

介然自守是道子

吾性剪劣安能儔

嗚呼七賢六逸所不屑

管鮑肅曹自抱負

巍似山嶽壓林藪

運思汪洋龍蛇走

志氣軒昂衝北斗

忠實精悍荻子有

經論之才誰出右

似茹秋實飲醇酒

寬和亦能與人厚

幸喜執鞭隨其後

漢朋宋黨我其甘受

元田先生は明治天皇の御偉業を御助け申した功臣中の功臣である。そして丈右衛門氏が先生より斯様に評せられましたのは實に丈右衛門氏の人物如何を推知することが出来る。

丈右衛門氏は常に實踐躬行を以て學問の本領とし文句の穿鑿字義の研究の如きは學問最終の目的でないとして講話の暇には自ら擊劔をなし又一同をして大塚退野大人のものせられし道の教身の持方なる竹馬歌を合唱せしめられたものである。殊に洒掃應對の節には深く心を碎かれたものと思はれる。

慎みは朝な夕なの言の葉の

かりそめこの中にありけり

これが氏の愛吟の一たるを見ても氏の平素を推知することが出来る。氏が嘗て長岡監物氏と垂玉の温泉に遊ばれた。途中水の中にして彼方此方に行く道がある。先に立つものは彼方に後より来るものは此方にと云ひました。然るに彼方の道は悪しくあつたので此方へ渡れと云ひましたが中には渡り來らぬものもありました。時に氏は一同に向ひ何れの道も斯の如くで道を學ぶにも明なる先覺者の跡を踏むべきである。假令明かならざる人に從ひ是迄悪しき道を踏みても改めて善道に從ふは良いのである則今日の此道を見て知られよと何れも太く感じ合へりしと云ふことである。氏の説話概ね斯くの如く其教導懇篤諄々として人の肺腑に徹せしめ實に眞君子の名を得て敬服されたものであります。斯様に丈衛門氏を通して津尾子の精神は更に大に發揮せんとする時不幸命長からずして其蘊蓄せる所を廣く世に施すに至らざりしは返すくも遺憾のことであります。私は嘗て恒雄さんの宅で丈雄さんより一の御話を伺つたことがある。その年は丁度



丈右衛門氏の五十年に相當するので熊本に於て其年忌を営まれました。其の節丈右衛門氏の弟子何れも六七十の老人十餘名が參拜せられた御話等伺つて居りました。折柄東京にある氏の御夫人より書狀が參りました。丈雄さんは誠に感激に堪へざる面持で只今此の書狀によりますと昨日一向見知らぬ御老人が宅へ參られました。明日は確か御尊父様の五十年に相當すると思ひますから一寸參拜に罷り出でました。恭しく靈位に拜禮して立去られました。後にて五十金の供物のあるのに氣附きました。たこのことである。ともすれば人情紙の如しと云はるゝ。今日此美はしい御話を伺ひまして一入丈右衛門氏の御徳が思はれました。此方は幼時丈右衛門氏に就きて學ばれました村上楯頼氏であつた。

私は熊本を出立する時清子夫人の案内にて湯地家の菩提所たる船場町の源覺寺に至り順助氏を始め龍彦氏丈右衛門氏の墓に詣りました。寺は明治十年西南戦争の爲に火災に罹り其後建てられたものであります。境内何となく荒蕪に委せられてあるやうである。私は今龍彦氏の墓前に立ちて拜禮をして居ります。涼光院即往是秋居士と碑名を默讀した時津尾子の生涯が思ひ浮はれて涙さへ禁じ得なかつた。そして裏面に刻まれたる湯地丈右衛門橋維永謹建之とあるのを見まして私は丈右衛門氏の孝道至らざるなきに想到して太く追慕の念に驅られました。其隣に丈右衛門氏の墓碑が立つて居ります。私は湯地家代々の碑や湯地家譜代の家來の墓に手向の水を捧げて歸途に就きました。が當時私の受けました印象は永久に消え失せないことと思ふ。

#### 一、孫丈雄氏 乃木將軍

筑前の千代の松原に巍然として聳ゆる元寇記念碑がある。これは湯地丈雄氏が多年の奔走によつて出来たもので氏畢生の事業である。氏は常に護國の精神の鼓吹を以て任じて居られました。がこれも祖母津尾子の教訓の然らしむる所であると語られて居た。嘗て丈雄氏が當校へ御出になりまして一場のお話をせられたことがあつた。明治二十四年四月に當第三師團司令部に於て元寇の歴史を話したことがあつた。當時師團長は黒川中將旅團長は乃木少將故乃木大將であつた。そして始めて遇つた乃木將軍が私に向つてお前の事はよく承知致して居るお前の家の事が掛物になつて居るのを伊勢より取り寄せて我旅團司令部に掲げてあるお前が斯様に御國の爲に奔走せらるゝのもお前の祖母の教訓であらうとのことであつた。私は事の意外に驚き翌日旅團司令部に參り祖母の事が書かれてある掛物の前に座り自分は不肖ながら君の爲國の爲に一生盡す決心でありますから何卒お婆様御安心あつて御覽あれと思はず涙を流しました。たこのことでありましたが一同感慨無量であつた。大正元年十一月病を以て卒去せらるゝや事天聽に達し特に正七位を贈られました。二人の愛孫が斯くも天恩に浴せらるゝのを見て津尾子も嘸草葉の蔭で喜んで居らるゝことでした。

#### 一、佐々干城氏

佐々干城氏は佐々友房氏の令兄で津尾子は氏の大伯母君に當らるゝのであります。氏の話に津尾子は明治十年西南戦争の當時は私の宅に寄寓して居られました。が私も



友房も一度も小言を受け又は叱られたことはない誠に優しいそして静な人であつた私の頭に残つて居ることはどうしてあんなに優しいであつたらうと思はれることである。そしてどうして斯様に優しい人があんなに艱難に打ち勝つて来たのかと思ひ議で堪らなかつたことであつた。それで一日私の伯父なる飯田熊太と申す嘗て奉行をして居たものにおばあ様はあんな優しい人であつてどうしてあんな男の様な事をして来たのかと尋ねたことがありました。伯父さんは直に津尾子は誠に珍らしい律義な人で節操の高い人であつたからと云はれたので私は成程と感心しましたことでもあります。そして氏は家庭新聞切抜と記されし一封書を取り出してこれは先年池邊義象氏が籬の菊と題しておばあ様の事を記したもので此新聞に掲げてあつたのを斯様に取揃へて置いたものであります。誰か何かの難義に出遇つて居るものがあります。之を御覽なさいと言ふて送つてやります。先年も日露戦役後經濟界の變動の爲に當地の友人中にも非常に難義に陥つたものがありました。私は其節にも之を一々友の處へ廻しましてどうか之を讀んで世の中を悟つて貰ひたいと申しました。幸にも皆さんが御蔭で助かりましたと喜んで返しに來られました。他に又名古屋扶桑新聞切抜湯地氏より送付せしものなりと記されたものがある。はてなと思ひ見ますれば明治四十二年十二月十二日の扶桑新聞(今の名古屋毎日新聞の前身)で女學生七百名の墓參と題して前日本校職員生徒が徳源寺の津尾子の展墓の記事である。覺へず十年前のことが偲ばれて何とも云へぬ感がありました。

干城氏は一日津尾子刀自に向ひ扇面に何か書いて欲しいと申出られました。津尾子は早速平假名にて「くんしはもとをつとむ」と書いて與へられたことでもあります。これによつても津尾子の修養の如何を窺ふことが出来る。然し惜しいことには之も西南戦争の節何れへか失はれたことでもあります。私は佐々家の祖先は我愛知縣西春日井郡の比良即今の山田村である事を伺ひました。そして元龜天正時代の豪傑の一人たる佐々成政は津尾子より八代前の祖先であることを承知致しました。私は津尾子の墓地が當市徳源寺にあるのを嬉しく思ふと共に又津尾子の祖先が愛知縣であることを愉快に思ふのであります。そして孫の丈雄氏が偶然とは言へ其地に區長として在職せられましたことも何等かの因縁があるかの如くに思はれて一入追慕の念が出で、參りました。

一、津尾子と古橋氏

我愛知縣に於て最夙く津尾子を知り津尾子に崇敬の厚かつた人は三河の名家古橋源六郎氏であらうと思はれる。氏が秘藏の軸幅中に津尾子が籬側に立ちて暉狼の誦讀せる論語をいろは以て寫し取れる誠に尊き一軸がある。恐くは津尾子に關する畫幅の最古きものであらう。筆者の誰なるかは不明であるが明治十四年先代源六郎氏の請に應じて佐々友房氏が贈つたものである。末文に左の如く記されてある。

參河古橋君家世好善之士也 聞先大母之事甚稱讚之請予摹此圖予曰孝貞之人世不乏何必以大母乎辭之不許予於此謂大母往請賞典於藩主今又得追慕於君又予輩兒孫之餘榮也不可



古橋氏は常に之を息女の室に掲げて庭訓の資に供せられたと云ふことであるが私は古橋氏の用意の淺からざりしを思ふと共に津尾子を欽慕する念が一層高められました。

### 津尾子と徳操

津尾子が一世に稀なる女丈夫として働くに至りました其徳操は何によりて得られましたか之は誰れも知りたく思ふ所であると思ひます。人々の見解により種々の考察もありませうが私は津尾子が最も能く「姑」を理解されて居た人であると思ひます。そして此の一事が先づ以て津尾子の徳操をして一層偉大ならしむるに至つたものと思ひます。申す迄もなく姑は其家の家風を確と身に體する許りでなく嫁より年齢の多きだけよく世間の出來事に遭遇して居られますから常識に富んで居るのであります世に姑を六ツかしいと云ひますのは此意味であつてそして最六ツかしい姑とは畢竟賢い立派な姑を指すものと思はれます。若しも嫁であつてよく從順に姑に仕へましたならば姑の尊き數十年の經驗を僅の間に受け継ぎて自分が未だ花嫁時代に已に姑と同様に常識に富んだ婦人となることであらうと思ひます。従つて自分が姑と同じ

年輩になつた時には今の姑より幾倍立派な姑として社會に立つことが出來やうかと思はれる。津尾子は能く此事を呑み込んで居られたのであります。世間では時として姑を別人の様に思うて居るものがあるやうでありますが姑も一度は花嫁でありました。従て人情には變りはありません。一体小言と云ふことは申す迄もなく一寸した注意でも仲々人に與ふことは出來ませぬ。況して叱ると云ふに至りましては容易のことではない。然るに姑に限つて常に何かに附けて注意なり又は小言なりともすれば叱られることがあります。之には何か其處に深意がなくてはならぬと思はれます。世の多くの嫁は未だ自分の誠意の足りないことを棚に上げまして之を他人と云ふ冷淡な言葉で説明しやうと致します。「はい他人だから」とか「腹を痛めた子でないから」して喧しく悪し様に言はれると考へて居るやうであります。謬見も甚しいものである。試に姑の側に立ちて考へて御覽なさい。此某家は姑が今日迄數十年夜の目も寝ねす守り立て、來たものであります。今此大切な某家を此他人の嫁に相續させやうと考へたなれば如何でしやう。若又姑は嫁よりは勿論年上であります。年の多きものが先に死することが順序としますれば姑は此恐るべき死に最も早く日一日と近づきつゝあるのであります。將に死せんとする時よく安心して此嫁に死水を取らせやうと考へたなれば如何でしやう。誰も自分の健康な時に充分安心の出來るまで嫁を躑けやうとは思ひ及ぶことであらうと思はれます。夫れ故姑の所謂小言は姑が嫁に對して此家を相續せしめんとする心我に死水を取らしめんと



心の徴證で誠に以て有り難い心遣ひと言はねばなりません。私は世の女子殊に嫁たるものが篤と此深意を理解せんことを切望して止みませぬ。そして津尾子はよく此姑心を諒解し會得して仕へられましたのであります。夫れ故氣丈夫な姑の長煙管の折檻も有り難く克く耐へ克く忍ばれたこと、思はれる。斯様に津尾子の自分を忘れたの事へ振りは嫁と姑との間柄を肉親の如くあらしめたのみでない姑が多年體得した湯地家の家風更に云へば武士氣質を確に受け得たものと思はれます。津尾子は又誠に敬神の念の強い人であつたと思はれます。從て祖先を敬ふ心の厚い人でありました。やがて之れ津尾子に男子も及ばぬ鞏固なる信念を與へて居るやうに思はれます。私は佐敷に至りまして其地が敬神崇祖の念の厚いことを伺ひました。そして津尾子が活動せられた尊き居宅が神々しき春日神社の隣でありますことを見まして尠からず有り難く存じました。古老の一人は言はれる。津尾子は神に參らるゝにも寺に詣でらるゝにも朝早く又は夕方參られたもので人に見らるゝことを避けられたこのことでありますが私は津尾子が人知れず日々敬神の實修を勵まれてそして姑より受け得た武士氣質を一層確固たらしめられたこと、思はれます。かの社内に鬱々と茂れる古き楠や大なる老松が如何に津尾子の心裡に限りなき不動の靜さを與へたのでせう。そして同時に靜の中に盡きせぬ強き力を起さしめたのでありませう。なご思ひ俤ばれまして少時其處を立ち去ることを得ませんでした。彼の計石に於て小津尾子と迄言はれべき津尾子の雇女りう女は實に敬虔の念に富み信仰に厚い人

でありました。寢起きの自由も家人の手を借りる時でさへも毎朝寢床にありながら口を漱ぎ手を洗ひ正座して神佛の方を拜んで後初めて身を横になすのを常として居られました。家人が病勢の募らんことを恐れましたもこれは私の御務めだからと言つて終始一日の如く落命の其朝まで怠らなかつたと云ふことであります。私が此りう女を通して津尾子の熱烈なる信念を想察せずには居られませんでした。孫の恒雄さんは私に語つて祖母の生涯は我武士道を眞直に實行したものでして祖母は何事をなすにも巖に食ひ附きても爲すと云ふ辛抱強き人であつた。祖母は私共に向つて人に話し得るやうなものには心配と云ふ程のものでない誰にも話し得ない心配を我は爲し來たものだと言つて私共を戒められたと申して居られますが要するに此武士道此巖をも貫くと云ふ辛抱は思ふに津尾子が天與の稟性ではなくて多年の修養によつて得たる賜でなからうかと思はれます。そして之によつて津尾子が十三ヶ年の貧に對する惡戰苦闘も暉狼に對する徹底的教育も將又龍彦に對する限りなき同情も出て來たことであらうと思ふ。

又津尾子は年と共に自己の修養を怠らなかつた人であります。津尾子が四十八才の時藩主細川侯より母子兩人の善行を表彰せられ津尾子は藩侯の紋服をも拜領するの榮譽を荷ひました。津尾子が多年の辛勞も花咲き實結び茲に其素志を達したのであります。然し津尾子は世の所謂成功者の如く我と我心を倦ましめなかつたのであります。否々津尾子は益我心を緊張し斯る時こそ大事なれとて己が學問の足らざる



ことを思ひ暇あれば時の賢人哲士の門に往來し常に識見を廣め修養を力められたこととであります。古老の一人は言はれる。津尾子は大抵の時は何處かの先生を訪ねたものであります。夜遅くまでも御話などを聽かれたものであつた。そして丈雄恒雄の孫さんを連れて行かれたものであつたことである。當時津尾子が最崇敬して居られましたのは長岡監物であつた様に思はれます。長岡氏は前編に述べました通り細川藩侯の家老職で最傑出した人物でありました。藤田東湖とは交り極めて厚くありましたが東湖氏を評して温潤の中に雄虎の姿あり大將の器なり吾輩の遠く及ぶ所にあらずと。又西郷南洲の如きも常に氏の邸に伺候して天下の形勢を論じた程であります。一日人に語つて吾天下の人と交ること多くあるも未だ純忠至誠氏の如きを見ずと申して居られます。以て氏の爲人を知るに足るべきであります。氏は必由堂と名づくる學問所を竹部に設け大に學問を奨励せられました。そして藩の婦女子をも集めて婦徳に關する講話をせられたと云ふことであります。津尾子は何時も此處に出席せられたのであります。從て津尾子が晩年長岡氏の感化を受けられたことは一方でなかつたことと思はれる。同時に又氏が津尾子を信せらるゝことも一段と厚くあつたやうであります。丈右衛門氏が津尾子の還曆の祝賀を催されました時長岡家一族は擧て之が祝詞を贈り心から津尾子を祝福せられたのであります。明治十年津尾子が當名古屋にて死去せらるゝや長岡氏が菩提寺たる熊本の見性寺の僧蘇山禪師が遷りし市内徳源寺に埋葬せられたのも亦所以あることゝ存じます。

思ふに津尾子が徳操の修養は生涯を通じて限りなく積まれて行きました。之れ所謂日本婦道の眞髓で女武士道の體得とでも云ふことが出來やうかと思はれます。而して其究極は誠の一に歸結するとも云はれましょう。干城氏は湯地大伯母上様と題して

家守る只一筋の眞心に憐み給ふ天地の神

と讀まれて居る。誠に尤なこととあります。

斯様に津尾子が年と共に練磨せられし心魂は丈右衛門に先立たれし不幸更に又其嫁女に先立たれし不幸即人生あらゆる不幸と痛苦とを押切つて二人の遺兒の教育を完うせしめたのみでない彼が死する八十一歳の時數百里を隔てたる當名古屋へ來り人生到處有青山の慨を示して居られます。何と驚くべきではありませんか。

まがきのきくをよむ人に

義象

折りとりてこゝろにしめよ咲にはふ

まがきの菊のたかきかをりを

鵜飼校長に

同

君によりひかりそへけりたぐひなき

まがきのきくの露のしら白玉



附言

本編は私が佐敷へ参りまして古老を始め山本佐敷町長、新谷葦北郡視學、中村佐敷尋常高等小學校長諸氏に就き又熊本に於て湯地恒雄氏、佐々干城氏、小早川秀雄氏其他各位によつて聞き得た大要を記述したに過ぎませぬ。從て何等系統的叙述を企たものでない。只本傳の讀者をして幾分にも津尾子刀自の精神を解せしむる上に力強からしむるものがあつたならば私の願は已に達したのであります。然しながら私は元來淺學不才で古老を始め各位の尊き説話を充分に表はし得ないのを遺憾とするのであります。殊に此編を記すに當りまして宮内省御歌所寄人池邊義象先生の多大なる援助を受け又津尾子刀自の居住地であつた計石尋常小學校長山本長熊氏より有益なる資料を供せられたるこゝと及一谷熊本縣立高等女學校長が私と共に佐敷迄同行下さつて種々便益を與へられたことを此處に深謝して止みませぬ。

幸にも津尾子刀自の徳操偉蹟は今や各地に傳はり日本婦道の發揮に尠なからざる原動力となりつゝありますのを見て實に斯道の爲に慶賀に堪へませぬ。

大正七年十二月十一日

徳源寺なる津尾子刀自の展墓を終りて  
鶴飼金三郎誌す

湯地津尾子年譜

皇紀	御歴代	年號	年齡	要	項
二四五六	光格天皇	寛政 八	一	津尾子佐敷に生る	母も三三、龍彦一五
二四六五		文化 二	一〇	龍彦父順助歿す年四十三	母も三三、龍彦一五
二四六九		六	一四	龍彦佐敷番所詰仰付らる年十九	祖母六三、母三七
二四七一		八	一六	湯地龍彦津尾子と結婚す年二十一	祖母六五、母三九
二四七六		一三	二一	津尾子長女千代子を生む、祖母歿す年七十	龍彦二六、母四四
二四七八	仁孝天皇	文政 元	二三	津尾子長男暉狼を生む	龍彦二八、母四六
二四八四		七	二九	暉狼上林先生の門に入る年七歳	龍彦三四、母五二
二四八五		八	三〇	龍彦知行差上浪人となる年三十五	母五三
二四九六		天保 七	四一	津尾子天保の大飢饉に遇ふ	龍彦四六、母六四、丈右衛門一九
二四九七		八	四二	津尾子の赤心天に通じて湯地家の歸參叶ふ	龍彦四七、母六五、丈右衛門二〇
二四九八		九	四三	龍彦讒に遇ひて入獄す年四十八	母六六、丈右衛門二一
二五〇〇		一一	四五	龍彦疑晴れて出獄す年五十	母六八、丈右衛門二三
二五〇二		一三	四七	龍彦歿す年五十二	母七〇、丈右衛門二五
二五〇三		一四	四九	藩主津尾子の行狀を表彰す、母も歿す年七十一	丈右衛門二六
二五〇四		弘化 元	四九	丈右衛門時習館句讀師となる年二十七	
二五〇五		二	五〇	丈右衛門千勢と結婚す年二十八	
二五〇六		三	五一	丈右衛門御役を免ぜらる年二十九	千勢二二



二五〇七	孝明天皇	四	五二	丈雄生る………	丈右衛門三〇
二五一四	安政元	五九	恒雄生る………	丈右衛門三七	
二五一六	三	六一	津尾子還暦の賀會………	丈右衛門三九	
二五二〇	萬延元	六五	丈右衛門歿す年四十三………	千勢三七、丈雄一四、恒雄七	
二五三三	明治天皇	七七	丈右衛門妻歿す年四十九………	丈雄二六、恒雄一九	
二五三七	一〇	八一	津尾子名古屋に來る津尾子歿す………	丈雄三〇、恒雄二三	

本校に於ける事項

- 一、湯地津尾子を本校模範婦人に推擧す並に墓參  
明治四一、一二
  - 一、湯地津尾子の傳記編纂  
四一、一二
  - 一、湯地津尾子の肖像を掲ぐ  
四二、五
  - 一、湯地津尾子の傳記を生徒各自に携帶せしむ  
四三、三
  - 一、湯地津尾子の肖像を錢別として卒業生に分つ四四、三
  - 一、湯地津尾子の肖像を講堂に安置す  
大正二、一二
- 
- 一、名古屋市教育品展覽會へ湯地津尾子の事蹟を出品す  
大正四、一一年
  - 一、湯地津尾子の籬側に立てる圖を摸寫せしむ  
四、一一
  - 一、湯地津尾子の墓前に香臺を供ふ  
五、三
  - 一、湯地津尾子の追弔會  
七、三
  - 一、川崎小虎氏筆湯地津尾子の肖像畫成る  
七、三
  - 一、池邊義象氏の湯地津尾子に關する屏風軸幅  
七、三
  - 一、學校長湯地津尾子の舊地を訪ぬ  
七、五
  - 一、「湯地津尾子の傳附賢婦人の跡を訪れて」の書成る  
七、一二

大正七年十二月廿五日印刷  
大正七年十二月廿八日發行

(非賣品)

編輯者兼  
發行者

愛知縣立第一高等女學校校友會

代表者 足立喜六

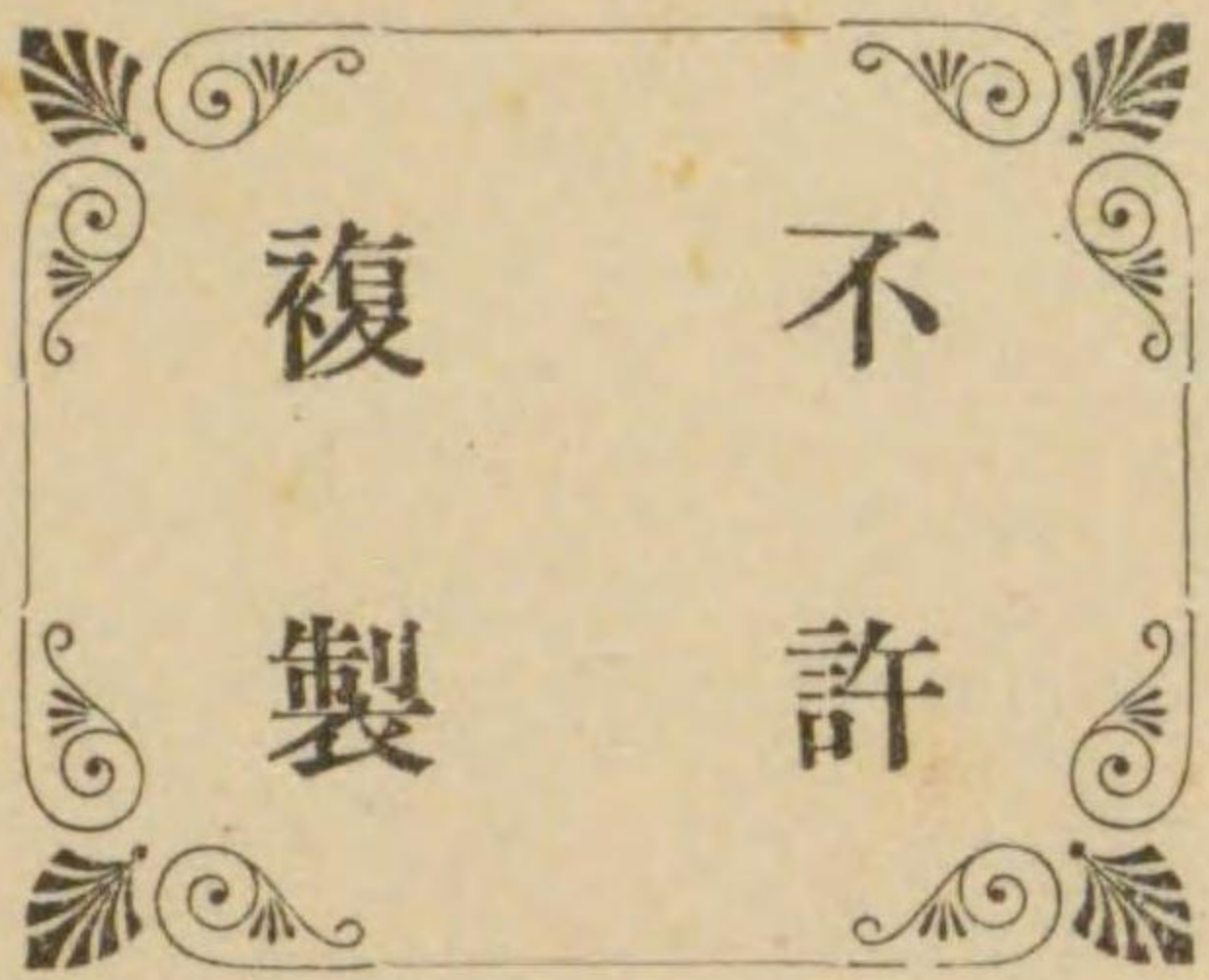
名古屋市中區東芳野町一丁目三番地

印刷者 英比貞造

名古屋市中區南大津町二丁目三番地

印刷所 扶桑社

名古屋市中區南大津町二丁目三番地





159  
80



